

3・11後の「いのち」を語る言葉を考える

主催：日本学術会議哲学委員会

共催：日本哲学系諸学会連合・日本宗教研究諸学会連合



日時 2013年12月7日(土) 14:00-17:30 (開場13:30)
会場 日本学術会議講堂 (東京メトロ千代田線「乃木坂」駅5番出口すぐ)

3・11後に限定するわけではないが、震災後に際立ってきた言葉のあり方について、とりわけ「いのち」を語る言葉のあり方について考える。

死とせめぎ合う「いのち」の叫びや息づかいを言葉はどう掴みとり、どう語って来たのか、あるいは、来なかったのか。言葉にならない、声にならない過酷な現実を前に、なお言葉を立ち上げ、言葉に収めどめ、生きる新たなエネルギーを可能にするような鮮烈な言葉が語られてきた一方で、当面は良きものとして発せられながら、結果としては空疎・軽薄・無力、ひいては暴力・詐術として働いた言葉もしばしばあった。

このシンポジウムでは、こうした「いのち」をめぐる言葉の、表現や伝達、理解、共感のあり方について、思想・宗教・文学・教育の問題として、じっくりと議論してみたいと思う。

**参加無料、事前申し込み不要
どなたでもご参加できます**

司会・コーディネーター

竹内整一 (倫理学・鎌倉女子大学教育学部教授)

パネリスト

末木文美士 (仏教学・国際日本文化研究センター教授)

“死者、自然、時間”

影浦峯 (教育学・東京大学教育研究科教授)

“語りの配置と言葉の場所”

田口ランディ (作家)

“物語に何ができるのか”

谷山洋三 (臨床死生学・東北大学文学研究科准教授)

“「いのち」に寄り添う宗教者”

コメンテーター

野家啓一 (哲学・東北大学文学研究科教授)

清水哲郎 (死生学・東京大学人文社会系研究科教授)